

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

A Study on Ecological Planning Ideas and Ecotourism

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2009-04-28 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 下休場, 千秋 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00002088

エコロジカルプランニングの思想とエコツーリズム

下休場 千秋
(大阪芸術大学芸術学部)

A Study on Ecological Planning Ideas and Ecotourism

Chiaki Shimoyasuba
(Osaka University of Arts)

エコツーリズムはこれまで環境保全と経済的開発とを両立させる持続可能な発展の一つの実現手段として注目されてきた。しかし一方では、その開発が環境へ悪影響を及ぼす危惧が指摘され、西欧先進国の第三世界諸国に対する新植民地主義にたとえられることもある。

本稿では、アフリカ、カメルーン共和国における調査事例を取り上げ、エコロジカルプランニングの提唱者である I.L.マクハーグの論考を検討することにより、エコツーリズムにおける持続可能性の意味と非西洋哲学に基づくエコツーリズムの新たな概念について考察を行う。

Ecotourism has been said to be a kind of sustainable development which realizes both environmental conservation and economic growth simultaneously. However, it has been pointed out that it causes environmental degradation, and it is often compared to neo-colonialism of the Third World by the Western developed countries.

In this paper, the meaning of sustainable development as it relates to ecotourism and a new concept of ecotourism based on a non-Western philosophy are analyzed by giving consideration to a treatise of I.L.McHarg who is prophet of ecological planning as applied in a case study of one touristic project in the Republic of Cameroon in Africa.

- | | |
|---------------------|------------------|
| 1. はじめに | 4. 聖地でのエコツーリズム計画 |
| 2. デザイン・ウィズ・ネイチャーとは | 5. おわりに |
| 3. エコロジカルプランニングの思想 | |

Key words: ecology, McHarg, ecotourism, design, spirit

キーワード：生態学、マクハーグ、エコツーリズム、デザイン、精神

1. はじめに

1960年代から70年代における公害を初めとする環境問題の発生により、環境に対する人々の関心が高まった。環境計画分野においては、1970年代から持続可能な発展という新しい概念が議論されはじめた。この概念は国際自然保護連合（IUCN）が1980年に提言した「世界保全戦略」のなかで最初に公式に使われたといわれる。その後、「持続可能性」と「持続可能な発展（サステイナブル・デベロップメント）」は環境問題を考える際の新しい指導原理となった。（IUCN 1980）。

この概念については様々な定義がなされているが、その一つに「持続可能な発展とは、生態系がもつ環境容量の範囲内において人間の生活質を改善していくものである。」という定義がある（IUCN/UNEP/WWF 1991）。前述した「世界保全戦略」のなかにおいて持続可能な発展は、生態系の適性評価、環境アセスメント、これらの評価とアセスメントに基づいた環境資源の利用によって可能になるといわれている（IUCN 1980）。

持続可能性についての議論をふまえて過去30年余りの間に、地球上の生態系をどのように持続可能なかたちで利用すべきかについて多種多様なエコロジカルプランニング（ecological planning）論が案出された。それらの中でも、I.L.マクハーグ（Ian L. McHarg）⁽¹⁾が1969年に出版した著書『デザイン・ウィズ・ネーチャー（Design with Nature）』において示したエコロジカルプランニングの思想と計画方法論は、環境の保全と開発との統合をめざす持続可能な発展についての概念を明確に示したものとしてこれまで注目されてきた（McHarg 1969; マクハーグ 1994; Shapiro 1997）。

以上のような西欧先進国を中心とした地球環境の保全に対する取り組みの動向のなかで、観光の側面からはエコツーリズムが環境保全と経済的開発とを両立させる持続可能な発展の実現手段の一つとして関心を集めてきた。エコツーリズムの概念は多様であるが、本稿では以上のような持続可能性についての定義を前提とした上で、主に非西洋文化圏に属する第三世界諸国におけるエコツーリズムの課題と今後の方向性について、カメルーン共和国でのケーススタディーをふまえて考察する。その際マクハーグが提唱したエコロジカルプランニングの思想を分析することにより、特に非西洋哲学に基づく多様な民族文化を尊重した新たなエコツーリズム概念形成の必要性について論ずることとする。

2. デザイン・ウィズ・ネイチャーとは

マクハーグが提唱したエコロジカルプランニングの概念は、彼が自著の題名で用いた「デザイン・ウィズ・ネイチャー」という言葉が示すように、自然環境を支配する生態学的原理の科学的理解を基本とした計画（地域生態計画）という意味をもつ。彼は地域生態系を自然の動的な相互作用システムであるとした上で、エコロジカルプランニングを人間の多様な環境利用に対して地域生態系が示す本質的な可能性と制限を明らかにする手法であると定義している。具体的な計画手法としては、地域生態系の変遷を示す環境の構成要素である地質、地形、土壌、植生、地表水、土地利用等の地図をオーバーレイ（重ね合わせ）することにより、土地利用に対する可能性と制限の度合いを地図上に視覚的に表現する手法を提案した。地理情報システムの基本的概念を示したこの計画手法論は、現在では土地利用の立地適性評価や環境アセスメント等の持続可能な発展の前提となる環境資源の適切な利用には不可欠なものとなっている。環境容量を超えるオーバーユースによる環境破壊を適性な土地利用ゾーニングを行うことにより未然に防止する計画手法として、マクハーグのエコロジカルプランニングはエコツーリズム計画においても有用であると考えられる。

彼がデザイン・ウィズ・ネイチャーの概念を用いて説明しようとした自然観は、自然を人間にとって利用可能な資源であるという従来の地域計画における自然観と大きく異なるものである。それは地球生態系の進化・創造過程、物質循環、エネルギーの流れとエントロピー、ホメオスタシス（恒常性）等の生態学の原理を援用することにより、人間も地球生態系の一員であることを強調した。彼のエコロジー思想は生態系の自然科学的理解にとどまらず、生態系の一員として人間がどのように行動すべきか、あるいはどのような自然観をもつべきかについて倫理観、道徳観、審美観にまで立ち入ることを要求している。

以上を踏まえて、これまで十分に評価されてきたとはいえないマクハーグが唱えたエコロジカルプランニングの思想について考察する。

3. エコロジカルプランニングの思想

マクハーグは自著『デザイン・ウィズ・ネイチャー』の各所において、ユダヤ教やキリスト教における世界の創造物語に基づく人間中心の自然観によって、今日の生態学的な価値を正しく評価しえない経済システムが人類によって造りあげられたという問題点を指摘している。それに対して世界各地のアニミズム等の汎神論的信仰や仏教、道教、神道などの東洋の宗教や風水思想が示す自然観は、マクハーグが提唱したエコロジー思想により近いものであると述べている。彼はアメリカ・インディアン、オーストラリア・アボリジニ、古代ギリシャ、日本の伝統文化などにおける自然観を例にあげ、人間にとっての自然の生態学的価値を汎神論

的宇宙観に基づいて見直す必要性を強調している。エコロジカルプランニングは、西洋の生態学を中心とした自然科学的知識を駆使して適切な環境利用を図る計画手法であると同時に、自然環境破壊の原因といわれる西洋におけるユダヤ教やキリスト教による人間中心の自然観をあらためることにより新しいエコロジー思想に基づく自然観、倫理観の確立をめざすものでもある。

このような彼が主張した西洋近代における生態学を中心とした自然科学的知識に基づく非西洋哲学的な自然観、倫理観は、その多くが非西洋文化圏に属する第三世界諸国におけるエコツーリズムのあり方を考える上で重要な意味をもつと考えられる。次に、ケーススタディーとしてアフリカ、カメルーン共和国⁽²⁾における事例を取り上げることにより、マクハーグが唱えたエコロジカルプランニングの汎用性について考察する。



写真1 現在、施工中の「レイク・アウイン・ツーリストティック・プロジェクト」
(筆者撮影)

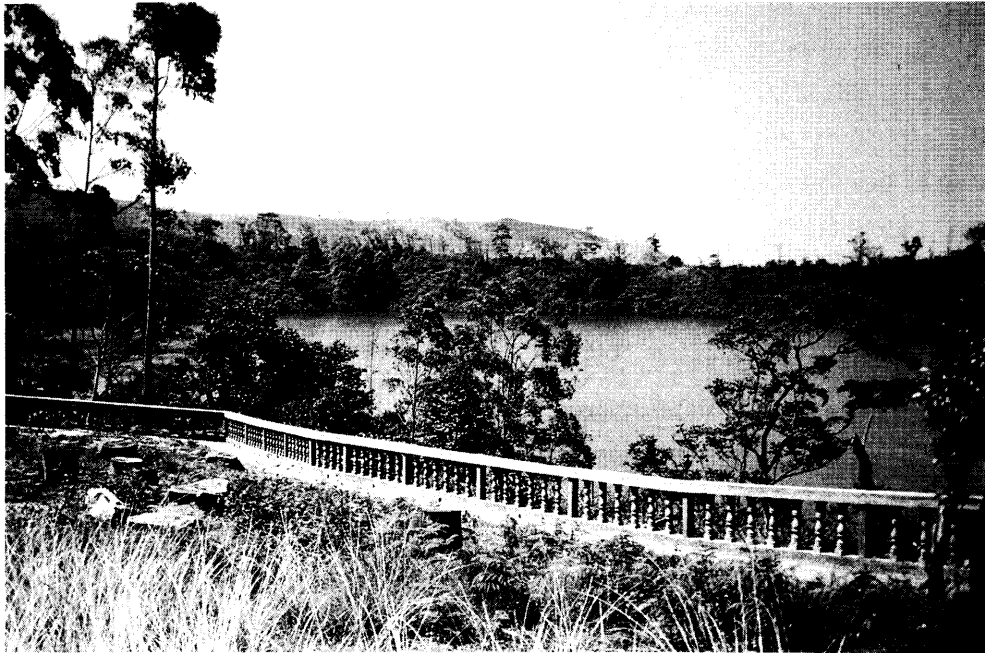


写真2 アウイン王国の聖地, アウイン湖
(筆者撮影)

4. 聖地でのエコツーリズム計画

ここでケーススタディーとして取り上げる「レイク・アウイン・ツーリストティック・プロジェクト」はカメルーン共和国政府観光省によるカメルーン北西州では最初の事業である(写真1参照)。計画地域は、北西州の州都バメンダから南約20kmに位置するアウイン王国⁽³⁾の領域内にあるアウイン湖の湖畔である(写真2参照)。計画は10年以上前から考えられていたが、約1,600万CFA(約230万円)の事業予算で第1期工事が始まったのは2000年3月からで、現在も工事が進行中である。事業内容は、敷地、道路、欄干、ベンチ、ビジターセンター、バンガロー等の整備を行うと同時にインタープリターの養成を行い、アウイン湖を訪れる観光客に憩いの場を提供すると共にエコツーリズムの拠点を整備するものである。現在の工事に続く第2期工事の予算がつけば、ホテル、レストラン、ロッジ、テニスコート、湖への階段、放牧牛の水飲み場等の整備を行う予定である。北西州観光省の関係者⁽⁴⁾によると、今後同様のエコツーリズム事業計画を同州内に存在する滝、湖、自然林地域等の他の観光資源周辺においても行う予定だという。

アウィン湖は火口湖であるため、湖畔は湖から流下する唯一の河川部を除き急斜面を形成している。湖畔地域の主な植生は、ユーカリ植林、自然林、草原、畑地である。観光省の担当者によると、湖畔において事業対象地を選定するにあたり評価した環境項目は植生、地形、景観、レクリエーション利用、雨季の土壌浸食、宗教的価値等であるという。環境アセスメントの結果、施設整備が必要な事業対象地は自然植生林を避けてユーカリ植林地が選定され、その中でも湖の景観価値が高く、土壌浸食や斜面崩壊の危険性が少ない平坦地が選定された。レクリエーション利用の面からは、パラグライダーや乗馬などが可能な草原が背後に控えている場所が選定された。エコツーリズムの計画とはこのような貴重な自然が残っている地域を対象にして、何らかの開発の手を加える行為であるため、その場合には環境に対する細心の配慮が必要とされるのである。

一方アウィン湖は、地元のアウィン王国の人々にとっては、歴代王の祖霊が眠る聖地である。また王国に伝わるアウィン湖に関する伝説によると、アウィン湖は火口湖であるため現実には移動するはずはないのであるが、もと湖があった場所の人々がゴミを湖の中に捨て続けたために湖が怒ってその場所から現在の場所に移動してきたという。この伝説からうかがえるアニミズム的な汎神論的信仰をもつ王国の人々の自然観には、生きている人間を庇護してくれる祖霊が眠っていると信じられている聖地であるアウィン湖の環境を大切に守っていくことが、今に生きる自分達にとって大変重要なことであり当然の義務であるという価値観を見いだすことができる。事実、現在のアウィン湖は環境破壊や水質汚濁等の環境問題は全く見受けられず、地域外から時折訪れる観光客はその美しさに感動を覚えるのである。マクハーグが唱えたエコロジカルプランニングの思想に見られるような地域住民の自然観によって王国の聖地であるアウィン湖の環境がこれまで大切に守られてきたのである。

この事例からいえることは、地域住民の心のよりどころである聖地の湖が観光資源としての新しい価値を持ちはじめたとき、その環境の持続可能な発展を図るためにはそれに見合った計画手法論とエコロジー思想が必要になるということである。適切なエコロジカルプランニングの手法と思想が基本となって、湖畔や湖面を利用した様々なレクリエーションの可能性や自然景観美をもつアウィン湖はアウィン王国の聖地であると同時にエコツーリズム計画の適地となる可能性が高まるのである。

このエコツーリズム計画の事業はまだ始まったばかりであるが、幸いにして、聖地であるにもかかわらずこの事業はアウィン王国の人々に好意的に迎えられ、既に施設の施工によりかなりの資金が地元民に流入している。その背景には、経済収入の増加に対する期待と、地域住民、行政、専門家等の計画関係者間における計画内容に対する合意形成努力があったと考えられる。例えば湖畔の中でも特に歴代王の祖霊を宿していると信じられている場所は厳格に保護されている。近い将来においてこれまであまり観光客の訪れることがなかった湖畔に

において、ツアーガイド、飲食品・土産物販売、交通サービス、施設使用料の徴収等により、地域住民は経済的恩恵を受ける機会が増加すると予想される。

マクハーグが提唱したデザイン・ウィズ・ネイチャーの思想に基づき考察してみると、今後このエコツーリズム計画において重要なことは、アウィン王国の地域住民にとって経済効果を高めるだけではなく、その計画プロセスにおいて環境に対する外部からの評価の目にさらされることをきっかけとして、住民自身がそれまで伝承してきた自然観を再確認する機会をもつことにより、自分達の環境保全や伝統文化に対する価値観をより明確なものとするものでなければならないということである。これからも地域の伝統的な汎神論的自然観、宗教観を伝承していくことが、アウィン湖の環境保全につながるのである。

デザイン・ウィズ・ネイチャーの思想に基づくデザインは、計画地域の生態系、すなわち全てが関連して存在している物理的、生物的、社会的、文化的、経済的環境からみて、社会的費用が最少で社会的便益が最大になるものでなければならない。その際に最優先しなければならない価値は、地域生態系の自然作用であるという。またアウィン湖は地元のアウィン王国の人々にとっては、先述したような伝説が言い伝えられている聖地であり、地域住民にとりこの湖がもつと考えられている靈魂（spirit）は、同時に住民自身が心の中にもつ魂でもある。マクハーグが提唱したエコロジカルプランニングの思想では、人間の心の靈魂と、自然が宿すと考えられる靈魂、彼の言葉で言えば「自然の作用」とが一体化するような環境を創造することが、デザイン・ウィズ・ネイチャーの目的でなければならないという。私はこのような意味において、“デザイン・ウィズ・ネイチャー”を“スピリッツ・ウィズ・ネイチャー”といいかえたい。自然作用が示すスピリッツに謙虚に耳を傾けると同時に、自分自身の心の中に宿すスピリッツをも尊重しなければならないのである。

また環境計画は複数の関係者の合意形成を経て意志決定されるものである。そのため上記のようなエコロジカルプランニングの思想が、関係者間の社会的合意事項となっている必要があり、その意志決定過程において、地域住民、行政担当者、専門家がそれぞれの立場から、計画対象地域のエコロジカルな環境特性の評価について合意形成を図る必要がある。

5. おわりに

エコロジカルプランニングの思想は、生態学を中心とした近代西洋の科学的知識を駆使して適切な環境利用の方向性を明らかにするものであると同時に、世界各地の多様な民族文化が保持している非西洋的な汎神論的自然観を重視するものである。これまでのエコツーリズムの概念はキリスト教的な人間中心の自然観に基づくものであった。エコロジカルプランニングの思想が示しているアニミズム的な汎神論的自然観とよく似た伝統的自然観、宗教観が

色濃く残されている中央アフリカ、カメルーン共和国のアウィン湖におけるエコツーリズム計画において環境容量を設定し開発適地を選定する環境アセスメントを行うにあたり、生態学をはじめとする西洋の近代的自然科学知識を導入する必要があると同時に、非西洋的で多様な伝統的自然観を重視するマクハーグの言葉で言えば「人間と環境の適合性が高い」、人間にとっても自然にとっても最適な環境を創造する新しいエコツーリズムの概念が必要とされているのである。

今後西欧先進国はいうに及ばずカメルーンのような発展途上国においても、経済的な開発と環境保全の両立をめざす持続可能な発展を実現化する有力な手段の一つであるエコツーリズム計画が必要とされている地域において、非西洋哲学に基づく多様な民族文化の自然観を尊重したマクハーグが示したエコロジカルプランニングの思想は、新たな非西洋型エコツーリズム概念を形成する上でより重要な意味をもつものと考えられる。

謝 辞

本稿を作成するにあたり、国立民族学博物館共同研究会「自律的観光の総合的研究」（代表：石森秀三）において発表する機会を与えていただき、参加者の方々から有益なコメントを得ることができた。

また、現地調査にあたりカメルーンの多くの関係者にお世話になった。ここに記して、深甚なる謝意を表しておきたい。

注

(1)イアン・L・マクハーグ（米国ペンシルベニア大学名誉教授）は、1920年スコットランド生まれ。1950年にハーバード大学ランドスケープ・アーキテクチャー修士号、翌年に同大学で都市計画学修士号を取得し、1954年より1986年までペンシルベニア大学ランドスケープ・アーキテクチャー&地域計画研究科学科長・教授。都市・地域計画分野において、エコロジーの思想をふまえて、多様な自然環境要因を評価する計画手法を確立した先駆者として高く評価されてきた。一般的にエコロジカルプランニング（地域生態計画）と呼ばれている計画論により、2000年度の日本国際賞（国際科学技術財団）の都市計画分野において、「生態学的都市計画プロセスの確立と土地利用の評価手法の提案」を授賞対象業績として、同賞を受賞した。

(2)中央アフリカに位置するカメルーン共和国は、砂漠、サバンナ、熱帯雨林等の自然環境や民族文化の多様性により「アフリカの縮図」といわれている。

私はカメルーン共和国において、1986年以來これまでに6回の現地調査を行った。

(3)カメルーン共和国北西州には、200以上の神聖王国が現存するといわれている。それらの王国は伝統宗教や民族芸術等の伝統文化を継承しつつ、近代国家体制において現在も行政・司法上の社会的機能を有している。アウィン王国はその中の一王国である。

(4)2000年12月28日現在、カメルーン共和国政府観光省北西州代表、フムナン・S・ジョセフ (Fomunung S. Joseph) 氏からのヒアリングによる。

文 献

McHarg, I.L.

1969 *Design with Nature*. New York: Natural History Press.

マクハーグ I.L.

1994 『デザイン・ウィズ・ネーチャー』下河辺淳。川瀬篤美総括監訳、集文社。

IUCN (The World Conservation Union)

1980 *World Conservation Strategy: Living Resource Conservation for Sustainable Development*. Gland, Switzerland: IUCN.

IUCN/UNEP/WWF

1991 *Caring for the Earth: A strategy for Sustainable Living*. Gland, Switzerland: IUCN.

Shapiro, H. A.

1997 *Ecological Planning in East Asia: Its Past, Present and Future*. Doctoral Dissertation, Kyoto University.

